

幕末詩人館柳湾詩における自然描写  
中国詩との比較を通して  
台湾大学 朱 秋而

江戸時代の末期の漢詩人館柳湾（一七六二～一八四四）は、新潟大川に生まれ、十三歳に江戸に出て、亀田鵬斎について学んだ。勘定奉行配下の役人で検見等のため、相模・出羽に出張もあった。文政十年（一八二七）退官、目白台に閑居し、漢詩の添削、著述の執筆、書の揮毫、篆刻に専念した。詩風は中晩唐を主とし、清純温雅にして庶民的情緒に優れている<sup>1</sup>。<sup>2</sup>柳湾詩作は『柳湾漁唱』初集・二集・三集に収録されている。編著には天保四年から明治までに刊行された漢詩の歳時記『林園月令』がある。

本報告では、『柳湾漁唱』を中心に、『林園月令』の編纂態度にも注意を払い、中国文学の自然描写と比較しながら、柳湾の詩作に自然はどのように描かれ、またどういう意味をもっているのかを探ってみたいと思う。

---

<sup>1</sup>渡辺秀英『日本古典文学大事典』第四巻、「館柳湾」による、岩波書店、1984年。